

おばあちゃん、美奈子  
だよ。

沢渡優希

## 一、 春 美奈子の笑顔

---

玄関が開く音が聞こえた、せっかちな伯母夫婦はもう外へ出てしまったみたいだ。

「美奈子、何してるのー」

思った通り。はやる気持ちは分かるけど、ちょっと待ってよ。

私がいないと、おばあちゃんの処へ行けないでしょう？

「はい、すぐ行くからー」

美奈子はそう答えると、鏡に映る自分の顔をじーっと見つめる。

ちょっと前髪を指で振るってみた。

うん。大丈夫、大丈夫。

部屋を出てきちんとドアを閉めた美奈子はとんとん、とりズム良く階段を下りた。

玄関までぱたぱたと足早に歩き、きちんと揃えてある靴を履く。

「伯父さーん、道が分からないでしょー？私の車で行こうよ、道案内って苦手なんだ」

玄関から顔を出した美奈子は、車のキーを振りながら声を上げる。伯父さんと伯母さんが、自分たちの車から荷物を降ろし始めたみたい。

美奈子は家の鍵を閉めて、家の前に駐めてある古い軽自動車のエンジンをかけた。

少し不機嫌なのは仕方がない。

それもそのはず今年で八年目、お願いだからまだまだ頑張ってるね。

可愛らしくお願いしたら頑張ってくれるかな？ 美奈子がそんな事を考えていると、大きな荷物を抱えた伯父さんと伯母さんが、美奈子の車に乗り込んだ。

「ごめんね、美奈子」

「ううん、いいの。後でお昼ご飯食べさせてね。それよりも……」

「え？ 忘れ物かい？」

不思議そうな顔の伯母に「何でもない」と、美奈子は首を横に振って見せた。

……二人揃って、後ろの席に座らなくたっていいのに。

美奈子はシートベルトを確認すると、シフトレバーを操作して慎重にブレーキから足を離す。

あちこち凹んでいる美奈子の愛車は、ゆっくりと走り出す。

少し暖かくなってきた。

柔らかな日差しが気持ちいい。

美奈子は周囲の様子を見ながら、ゆっくりと車列の流れに乗る。

「あのね、美奈子」

後ろから聞こえる、微かな伯母の声。

「んー？ なにー？」

古い軽自動車の車内は、とてもうるさい。

美奈子は伯母に聞き返す。

あんまり運転は得意な方じゃない、出来る事なら話しかけないで欲しいんだけど。

美奈子は苦笑いをしながら頬を搔いた。

「美奈子……お前にばかり、苦労掛けて」

「……伯母さん」

美奈子は小さく吐息を漏らす。

伯父さんは目を閉じて、何かを考えているようだ。

「いいんだよ。だって、私のおばあちゃんなんだから」

真っ直ぐな気持ちで美奈子は答える。

美奈子がそんな笑顔を見せられるようになるまでには、様々な出来事があった――。

## 二、 美奈子のこと

---

美奈子は、おばあちゃんっこだね……。

美奈子は幼い頃から、そう呼ばれて育った。

「おばあちゃん、おばあちゃん」って呼びながら、いつもとことこ後ろを一生懸命に付いて歩いていったって。

大きくなって社会人になっても「おばあさん」……ではなくて、美奈子はずっと「おばあちゃん」って呼んでいた。

「子供っぽいからやめなさい」

そう何度も注意されたけど、美奈子の呼び方は変わらない。

うん、それは今でも同じ。

父の日も母の日も、美奈子には関係なかったけど。そんな事はちっとも気にならないくらい、おばあちゃんは可愛がってくれた……。

両親との縁が薄い美奈子には、父や母との思い出がとても希薄だ。

七五三も、おひな祭りも、みんなおばあちゃんと一緒だった。

授業参観も、運動会も、学習発表会も、みんなおばあちゃんが観に来てくれた。

幼い美奈子はずっと、おばあちゃんを頼ってきた。

小学生の高学年になっても、おばあちゃんの布団に潜り込んで眠るのが大好きだった。

中学生の頃は、一人前に反抗したりしてみたけれど。

おばあちゃんは、にこにことした笑顔で美奈子の尖った心を、ふんわりと包み込んでしまった

。

美奈子は地元の商業高校を卒業し、地元の企業へ無事就職した。

地味だけど、地元ではちょっと有名な機械の消耗部品メーカーだ。大手ではなく中小零細企業だけど、少人数で気のいい人達ばかり。家族的な雰囲気職場に、美奈子は心底ほっとした。

就職、卒業とおばあちゃんは喜びっぱなしだったけど。

「まだまだ肩の荷が下りないよ、美奈子がお嫁さんに行くまでね」

「もう、おばあちゃんったら！」

美奈子は真っ赤になって抗議した。

職場では経理として配属された美奈子だったが、ふとした事から優れた才能を見つけて貰った

。

どうやら美奈子は、物を立体的に知覚する能力が秀でていいるらしい。

係長から、課長、部長へと話が上に昇っていき、とうとう美奈子は経理部から企画設計部へと配置転換されてしまった。

もとよりパソコンが得意だった美奈子は、すぐに設計用3Dのソフトを扱えるようにもなった

。

普通の女の子と形容すれば、いちばんしっくりする。いつも自己紹介で頭を悩ませるほどに、美奈子は特に目立った特徴を持っているわけではない。

だけど、いくつかの淡い恋も経験した。今は本社の営業社員、『秋鹿 広樹』とちょっと仲が良い。

取引先から無茶な注文をあっさり引き受けてくるので、企画会議でぶつかったりもするけれど。美奈子は広樹の情熱を、ちゃんと認めていた。

仕事を終えて帰宅すると、おばあちゃんを車に乗せてスーパーへ買い物に行く。一杯に品物を入れたカートを二人で押して買い物をして、家に帰ると一緒に夕飯の準備に取りかかる。

洗濯や掃除、料理といった家事全般も、おばあちゃんからの直伝だ。

教えるのがあまり上手じゃなかったから、たくさん怒られた。

美奈子が得意なのは、煮物など和風の料理。肉じゃがなんてお手の物。

おばあちゃんに教えて貰った料理で一番好きなのは、あっさりしたお味噌汁。豆腐と油揚げ、間引き菜に分葱。美奈子はこのお味噌汁だけあれば、他におかずなんて必要無い。

『美奈子の味覚は古くさい』

中学からの親友、由美はそう言って笑うけど、美奈子は一向に気にしない。

ありふれたと言ってしまえば、つまらないけれど。

仕事に恋に……美奈子はそんな普通の生活を楽しんでいた。

### 三、おばあちゃんのこと

---

かなめさん。

おばあちゃんの名前は、かなめさん。

「当時にしちゃ、ハイカラな名前だよねえ」

郁代伯母さんは、そう言って笑う。

「かなめさん」って名前を呼ばれると、おばあちゃんもちょっとくすぐったそう。

長男の元義伯父さん、長女の利子伯母さん、次女の郁代伯母さんに美奈子の父、秀一は末っ子だ。

おばあちゃんは、四人の子供を授かった。

誰もが貧しかった戦後の混乱期から、日本が大きく変わった高度成長期。

おじいちゃんは戦争で亡くなっていたから、おばあちゃんは女手ひとつで四人の子供を育てなければならなかった。

機械なんて無かった時代、田んぼや畑はみんな手作業。

それだけでは子供を育てるためのお金が足りなくて、時には男の人夫さんに混じって保線工事で線路の枕木を運んだりなんて力仕事もしていたんだって、郁代伯母さんが教えてくれた。若い頃にたくさん無理をしたから、おばあちゃんの体はあちこちが使い痛んでいる。

だからおばあちゃんは、優しいけれど男勝りでちょっと気が強い。

大人も子供も関係ない、見て見ぬ振りなんかしないでちゃんと叱る。

車にはねられて用水路に落ちている犬を助けようとして、ひどく脅えている犬に噛まれたりした事があったっけ。

「川の中で水に浸かって、可愛そうだったんだよ」

がぶって噛まれたのに、とっても痛そうなのに、そう言って笑っていた。

男勝りじゃなきゃ生きていられなかった。

男親がないから、一人で父親と母親の二役をこなしてきた。

美奈子には、それがよく分かっている。

おばあちゃんのお里は、とてもちいさな田舎の村。

住み慣れた郷里を後にして、美奈子の父と今住んでいる街へと引っ越した。

「色々あったからだよ。つまらない話でね、お前に聞かせる事もないから」

さっぱりとしているおばあちゃん、美奈子は愚痴なんか一度も聞いた事がない。

そして美奈子の父はこの街で結婚し、数年後に美奈子が生まれた。

でもおばあちゃんの気性が災いして、嫁姑の問題で家庭は揺れ続けた。

美奈子がみつつの時に父と母は離婚し、母よりもおばあちゃんに懐いていた美奈子は父に引き取られた。美奈子が小学五年生の頃に父は再婚したけど、やはり再婚相手とおばあちゃんは折り合いが付かず、今度は父が継母と共に家を出て行き、美奈子はおばあちゃんと家に残った。

美奈子が、中学二年生の春だった。

それからおばあちゃんは、美奈子のために一生懸命に頑張ってくれた。

「祖母に育ててられた子供は、甘やかされているから駄目だなんて言わせないよ」

美奈子は、おばあちゃんに厳しく躰けられて育った。

高校の卒業式で友達のお母さんが、

「仁科さん、よく頑張られましたね」

そう声を掛けて貰った事がとっても嬉しかったって、美奈子はおばあちゃんから何回も聞いた

。

強いおばあちゃん。

優しいおばあちゃん。

美奈子と二人三脚で、楽しい事をたくさん数えながら頑張ってきた。

アルバムに貼られた写真の中で、美奈子とほっぺたをくっつけてにっこり笑ったおばあちゃんはとても嬉しそう。

美奈子はその写真を見る度に、おばあちゃんの笑顔につられてそっと微笑む。

## 四、おばあちゃんの退院

---

不安を抱えて訪れていた病院は、薄暗くて怖い場所に思えていたけど。今日はまるで違った所に来たみたい。病院の自動ドアが開き、足を踏み入れた美奈子はそう思った。

受付の前で大きな鞆を置いて息を付くと、事務員さんに少しお待ち下さいと案内された。病院に漂う消毒薬の匂いはちょっと苦手だ、美奈子は神妙な顔で身を小さくしてじっと待つ。

――今日は、おばあちゃんが退院する日。

「ありがとうございました、本当にお世話になりました」

「いえいえ、元気になって良かったね」

深々と頭を下げる美奈子に、主治医の浦部先生は柔和な笑顔を見せてくれた。

「そうそう仁科さん、少しだけお話があるんです……」

「あ、はい！」

そう言って、わずかに表情を曇らせた浦部先生は、美奈子へと椅子を勧める。

浦部先生は机の上に置かれていた大きな茶封筒から、MRIの写真を取り出した。思案深げに眉根を寄せて、顎を撫でるその仕草に不安を感じた美奈子が「あの……」と、小さく声を出す。

「あ、いやいや！ ごめんなさい」

浦部先生は、きちんと整えられた白髪のをぼんと叩いて表情を和らげ、自分も椅子に座った。

「おばあちゃんは運が良かったね。脳梗塞の発見も早かったし、それに梗塞の部位。ここだと脳が自分で頑張っていて、働きを補ってくれるからね。麻痺も起こらなかったし、本当に良かった」

蛍光管の光を当てられた写真には、脳梗塞の痕が黒い染みのように写っている。

言語障害や、半身麻痺などの後遺症が残らなかったのは幸いだった。以前にも説明されたが、美奈子は今でもその写真を見ると膝が震えてくる。

頭痛を訴えるおばあちゃんを病院へと連れてきた時、浦部先生はすぐに入院を勧めた。

浦部先生はすぐに、緊急性を感じ取っていたらしい。その日の内に浦部先生は、嫌がるおばあちゃんを一生懸命におだてたりなだめたりして、入院を承知させたのだ。

「一ヶ月、一ヶ月だけ我慢してよ……ね？」と、おばあちゃんを拝むように手を合わせてくれた。

MRIやCTを使って行われた検査の結果。脳梗塞が見つかって、おばあちゃんは長い間入院した。

再発防止のため、主に点滴での治療を行いながら経過を観察して、状態が安定したところで長期療養の病棟へと移って、社会復帰のためのリハビリを行った。

美奈子はその間、会社の帰りとお休みの日と、毎日おばあちゃんの様子を見に行った。

洗濯物を取りに行かねばならない事もあったが、家でひとりになる美奈子をおばあちゃんがひどく心配して「もう帰る！」と、だだをこねて看護師さんを困らせるからだった。

「もう大人なんだけどな……」美奈子は、そう思わないでも無かったけれど。

なにより、美奈子もおばあちゃんが心配だった。

「仁科さん。おばあちゃんはね、以前から心臓がちょっと問題を抱えていて、心房細動と不整脈があるんだ。その関係で脳梗塞が再発するリスクっていうのが、どうしても残ってしまう」

「再発のリスク……ですか」

心房細動や不整脈が起こると、小さな血栓が発生し心臓からの動脈を通過して脳に達する事がある。これが、おばあちゃんの脳梗塞の原因だった。

……それが、また起こる心配があるなんて。

「うん」

頷いた浦部先生は、不安そうに両手をきつく握った美奈子へと笑顔を見せた。

「おばあちゃんに異変を感じたら迷ったりせずに、すぐに連絡をして下さいね。同じリスクを抱えている人もたくさんいる。大丈夫、きちんと様子を見ながら投薬するから」

「……分かりました、お願いします」

顔を上げて答えた美奈子の肩に、大きくて柔らかな手をそっと置いた浦部先生は、

「よく頑張ったね、おばあちゃんのリハビリの成果が良かったのは、美奈子ちゃんのおかげだよ。毎日、おばあちゃんに力を付けてくれたからね」

そう言って微笑んだ。

入院費などの精算を済ませた美奈子が、たくさんの来院者でざわめく待合室へと戻ると、おばあちゃんは入院中に仲良くなった若い看護師さんと話をしていた。

「私も、おばあちゃんっ子だから」

そう言って笑う看護師さんはおばあちゃんを気に掛けてくれて、美奈子にもよく毎日の様子を教えてくれた。

「あ、美奈子ー」

美奈子に気付いたおばあちゃんが、片手をよっこいしょと挙げた。

「ああ、仁科さん。手続きは終わりましたか？」

「はい、お世話になりました。ほんとうにありがとうございました」

ここでも深々と頭を下げる美奈子に、看護師さんは「もう、やめて下さいよー」と、美奈子の両腕をぽんぽん叩く。

「じゃあ、私も仕事があるし、もう行かなきゃ。お大事に」

看護師さんは、長椅子に座っているおばあちゃんの顔を覗き込んだ。

「おばあちゃん、良かったね。明日から美奈子さんと毎日一緒よ！ 困らせちゃ駄目なんだからねー」

顔の皺を深くして笑うおばあちゃんに、看護婦さんは手を振ると病棟の方へと歩いていった。

「えへへ、おばあちゃん……退院だね」

美奈子は少し気恥ずかしい。

「……うん」

照れたように、こっくり頷いたおばあちゃんに手を貸して、ゆっくりと立ち上がらせてあげる

膝が悪いので大きな力を掛けたり、急な動作はさせられない。

美奈子は、それをよく心得ている。

「さー我が家に帰ろうねっ！」

病院を出て「よいしょよいしょ」「いちにいちに」と、駐めてある美奈子の軽自動車まで歩く

。

助手席におばあちゃんを座らせて、大きな荷物をトランクへと積んだ美奈子が運転席に座ると

。

「美奈子……お前、またどこかにぶつけたね。へこみが増えているじゃないか」

ぽつりと言ったおばあちゃん。

「もうっ、おばあちゃんったら！」

へこんだところの数なんか覚えて無くてもいいのにっ！」

ぷうっと頬を膨らませた美奈子は、えいっと車のエンジンを掛けた。

## 五、きつねうどん

---

病院からの帰り道、美奈子は真剣な顔でハンドルを握る。

もとより車の運転がうまくない上に、久しぶりにおばあちゃんを乗せている。美奈子は肩がこるくらいに緊張していた。まるで初めて車を運転する初心者のように、何度もルームミラーとサイドミラーに目を向ける。

大きな通りに入り、車の流れに乗ると幾分美奈子は安心した。

ベッドもきちんとしてあるし。

掃除もしたよね、部屋も廊下も玄関も……。

赤信号で停車する度に、美奈子は頭の中で家の様子をぐるぐると思い出しては確認する。

助手席に座っているおばあちゃんの様子をちょっと見ると、美奈子の視線に気が付いたのかおばあちゃんがにっこり笑った。

あ……。

何となくこみ上げる、気恥ずかしさと嬉しさに、美奈子もおばあちゃんに微笑み返す。

「……美奈子」

「な、何？ おばあちゃん」

「お腹空いたねえ」

「お、お腹ー？ え、えとえーと。そ、そうねー」

美奈子はそこで、はたと気が付いた。

お昼ご飯の用意を忘れていた、美奈子は心の中で頭を抱える。

あ……そうだ。

ほんとは早く帰りたいけど。退院祝いだし、良いよね。

おばあちゃんが好きな、手打ちうどんを食べに行こう。

「おばあちゃんが好きなうどん屋さんで、お昼ご飯食べてから帰ろうよ」

横断歩道を渡る歩行者に注意しながら、信号を左折する美奈子。

「ほほ、うどんなんて、随分と久しぶりだね」

「久しぶりだねー」

うんうんと頷く美奈子は、心の中でポカを帳消しにした。

開店間もないうどん屋さん、案内された席に座る。

ほんとはお座敷でゆっくりした方がいいんだけど、おばあちゃんは膝が悪い。掘り炬燵のように、床面が低くなっていればいいけど、どちらにしても立つのが大変だ。

「ん～何食べる？」

筆で丁寧に書かれたお品書きを、二人で一緒に眺める。

「かうどんはやめようね、時季じゃないもの」

おばあちゃんには言えない理由がある、美奈子はおばあちゃんにお餅を食べさせるのがちょっと怖い。大丈夫だとは思うけど、お餅が喉に詰まったりしたら大変だ。

「じゃあ、きつねうどんにしようかね」

「あ、じゃあ、わたしもそうしよう」

美奈子はたいてい、おばあちゃんと同じ品を注文する。運ばれてきたお茶と入れ替わりに、注文を持って帰って貰う。時間が早いので、お店の中のお客さんはまだまばらだ。

うどんを食べに来ると、いつも思い出す。

美奈子には、忘れられない光景がある。

それは、小学五年生の冬休みだった。

美奈子はおばあちゃんに連れられて、岡山に住む郁代伯母さんの家に泊まりに行った。

おばあちゃんと、美奈子の継母との仲が思わしくなく、郁代伯母さんが美奈子を心配して呼んでくれたのだ。美奈子は特に郁代伯母さんに懐いていて、会うといつも「伯母さん、伯母さん」と、後ろをついて歩いていた。

ちょうどその時も、うどんを食べに行こうという事になって。美味しいと評判の、手打ちうどんを食べさせてくれる店へと出掛けた。

テーブルに着いた美奈子は、おばあちゃんと郁代伯母さんと一緒にうきうきしていた。

そんな美奈子が、ふと斜め前のテーブルへ目をやると……。

今のおばあちゃんよりも、もっともってお歳のおばあさんとその娘さんだろう、中年の女性がうどんを食べていた。

着物姿のおばあさんは背がとても小さくて、椅子に座っているけど草履を履いた足がぶらぶらしている。

いくら覗いても、テーブルに置かれた丼の底が見えていないんじゃないかと美奈子は思った。

そのおばあさんは、一生懸命に皺が一杯の手で箸を動かしてうどんをすすっている。

(おいしいのかなー)

その様子が何だか気になって、美奈子はじーっと様子を見ていた。

その時だった。

「ほらっ！こぼれてるでしょっ！」

おばあさんの連れの女性が発した鋭い声に、美奈子はびくりと体を震わせた。

「お母さん、着物が汚れるって！」

苛立ちを隠そうともしない女性の顔と声が怖くて、美奈子は慌てて目を逸らす。

しかし、女性に怒られているおばあさんが気になって、どうしても目がそちらへ行ってしまう

。

「早く食べてよ！ 時間がないんだからっ」

おばあさんは女性に罵られながら、一生懸命にうどんを食べ続ける。

(あんなに、怒らなくてもいいのに……)

ついに美奈子は涙ぐんで、目の前に運ばれてきたうどんを前にして俯いてしまった。

うどんなんてきれい……。

もちろん、うどんに罪は無い。でも美奈子には、あのおばあさんがうどんが原因で怒られているように感じられたのかもしれない。

唇を噛んで、ぽろぽろと涙をこぼす美奈子の前に、すっと割り箸が差し出された。  
郁代伯母さんは、そんな美奈子の様子に気付いていた。

「美奈子は優しいね、心配ないよ。さ、食べようね」

そう囁いた郁代伯母さんは美奈子の肩を抱いて、頭を撫でてくれた。

美奈子は今でも、その光景をはっきりと覚えている。

時間の流れが速くて、とても追いついていけない。

.....歳を取れば、誰しもそうなる。

だから美奈子は、自分が歩く速さをそっと緩める。

おばあちゃんが気付かないように、自然に歩みを合わせてあげる。

美奈子は絶対に、それを忘れてたりしない。

「ゆっくり食べて帰ろうね」

ちょっと首を傾げて、美奈子は柔らかく微笑んだ。

## 六、由美のお祝い

---

午後十一時過ぎ。二階から降りてきた美奈子は、そーっと居間を覗いた。

「おばあちゃん……もう、寝た？」

ほのかな明かりを灯すナツメ球。暗闇に近い室内で、じーっと目を凝らしてみると、おばあちゃんはベッドの上で静かに寝息を立てている。

おばあちゃんの退院に合わせて用意した、介護用の電動リクライニングベッド。

美奈子は、ほっと息を付く。

おばあちゃんがトイレに行った時、美奈子は部屋から顔だけ出して、ずっと様子をうかがっていた。

退院してから初めての夜、心配だから一緒に寝ると言ったけど。

「駄目だよ、美奈子。子供じゃあるまいし、縁遠くなるからちゃんと一人で寝なさい」

おばあちゃんに、ぴしゃりと言われてしまった。仕方なく納得して、ベッドへと潜り込んだもののなんだか落ち着かなかった。

おばあちゃんがよく寝ているのを確かめた美奈子は、足音を忍ばせて階段を上がる。

自分の部屋へと戻り、ベッドへ腰掛けて欠伸をしていると、突然美奈子の赤い携帯電話が震えた。

美奈子は、携帯電話がちょっと苦手。課長の配慮で、美奈子に限っては設計室への持ち込みも認められている。急を知らせる呼び出し音を耳にすると、美奈子は生きた心地がしない。

だから、携帯電話が苦手になってしまった。

でも、もうおばあちゃんは退院したから緊急の連絡じゃない。美奈子は安心して携帯電話を手を取った。

誰だろう？ ひょっとして広樹？ そわそわしながら携帯を開く。

着信 嶋本 由美。

あ！ 由美だ！ 美奈子は嬉々としてボタンを押す。

『おこんばんは一！ おーい、みな一、元気一！？』

いきなり聞こえた元気な声。

この元気の源は何？ 美奈子は思わずくすりと笑う、由美は小学校からの友達だ。

「私は元気だよ、由美はどう？」

『やあやあ、みなみな！ 元気、わたしはげんきっすよ！ ちょっと寒いけどねー』

「え？ 由美、いまどこ？」

『今ね金沢に来ているの。人使いが荒いんだーうちの会社は、やっとホテルに入ってくつろいだところ』

由美は旅行会社の企画部に在籍している、主に国内旅行のツアーを企画する仕事だ。

だから遠方への出張も多い、仕事熱心な由美の企画したツアーは人気が高いという。

『みな、おばあちゃん、今日退院だったよね』

「うん。由美、覚えててくれたの！ もう寝ちゃってる。私、ほっとしちゃって……」

『おめでとう、良かったね。美奈子』

「ありがとう、由美」

美奈子は目頭が熱くなった。ぐす、と鼻をならす。

『あ、もう！　みながまた泣く！　そうそう、仕事が終わったら、お祝いを持って行くからね』

「え？　いいよ、そんなの」

『そんな訳にはいかないよ。なんたって私は、みなのおばあちゃんに目を付けられてるから。点数稼いでおかないと、遊びに行けなくなるもの』

「あ、あ〜」

美奈子は苦笑いをした。

由美は思いつきで突っ走る癖がある。子供の頃は、いわばちょっとお転婆な女の子だ。

美奈子が小学生の低学年の頃。

二人ともちょっとませてきて「お化粧品を試してみたいね」なんて、由美と話をしていた。

母親がいない美奈子の家には、子供心にも感じるきらきらした綺麗な化粧水の瓶も、手にしただけでどきどきする口紅もない。

それを知っているからなのか、由美は自分の家からお母さんの化粧道具を黙って持ち出してきた。

由美は白いシーツを美奈子の体に巻き付けると、顔中にたっぷりファンデーションを塗り付け、はみ出るのも構わずに真っ赤な口紅で唇を染めた。

顔中をいじり回して出来上がったのは、それはもうまさに白塗りのお化けだった。

ちょうどその時おやつを持って来てくれたおばあちゃんが、振り向いた美奈子の顔を見て、急速冷凍されたように凝固する。

「どう？　どう？　可愛いでしょ」と、自慢げに目をきらきらさせている由美。

「う、う、う〜」

目を白黒とさせたおばあちゃん。

なにか怪しい雲行きに、気まずいものを感じた由美が立ち上がった瞬間。

「うちの美奈子に何をするっ！」

おばあちゃんの大声に、驚いた由美が一目散に逃げ出した。今思い出しても、すごい顔だったと美奈子は可笑しくなる。

あれから、おばあちゃんと由美が顔を合わせると、二人の間にばちばちと火花が散る。

でも、おばあちゃんは絶対に由美を悪く言わない。

「あの子は頼りになるね。でも美奈子、だからって迷惑を掛けちゃいけないよ」

おばあちゃんが、ぽつりと言った事がある。ひょっとして似たもの同士なのかなと、美奈子は思う。

美奈子は、由美が親友であることがとても嬉しい。

『ねえ、美奈子』

由美は急に落ち着いた口調で、美奈子の名を呼んだ。

「なに？」

『これからは、彼氏も大事にしてあげられるね』

「ちょ、ちょっと由美！」

携帯を耳に当てている美奈子の顔が、みるみる茹で蛸のようになった。

「広樹……秋鹿君は、そんなんじゃないって！」

『ぶーっ、私、秋鹿君だなんて言ってない』

「あ！」

からかうような由美、美奈子は思わず口を押さえた。

「もう、由美っっ！」

『あははは、美奈子。じゃ、帰ったら会おうね』

「あ、由美！」

ぷつ。

電話は一方的に切れた。

「もう！」美奈子は、ばふばふと枕を叩いて口を尖らせた。

これは会った時に、じっくりと話し合わなくちゃ。

でも……。

ありがとう、由美。

ぎゅっと枕を抱いて、微睡んできた美奈子はそっとつぶやいた。

## 七、お味噌汁

---

美奈子はふわふわで真っ白な雲の上に寝そべっていた。

温かい陽の光に、う～んと体を伸ばす。髪を撫でる風が爽やかで、とても気持ち良い。

何気なく手に触れた雲をちぎって口に入れた、綿菓子のようにふわふわで、ほんのりと甘い。

こうしていると、何もかも忘れてしまいそうになる。

でも、何か大切なことを忘れている気がする。

こんな空の上で？

何が出来るの？

あれ？ 私、何してるんだろう……。

雲の上に身を起こした美奈子は、びくっと背筋を伸ばした。

「そうだ！ 朝ご飯を作らなきゃ！」

美奈子が叫んだ瞬間、目の前の青空が暗転した。

「……あいったあ」

ベッドから転げ落ち、したたかに顔を打った美奈子は毛布を抱いてむくりと起きあがった。

しばらく何が起こったのか分からなくて、じんじんしている鼻の頭を撫でる。

「落ちたんだ。もう、ただでさえ低い鼻なのに」

恨めしそうにベッドを見る。美奈子が好きな薄いブルーのカーテンに、朝陽が当たって部屋の中はとても明るい。

涙が滲んでいる両目を、パジャマの袖でごしごしと擦った美奈子は、低いと気にしている鼻をひくひくさせた。

「あ、いい匂い」

鼻腔をくすぐる匂いに、美奈子のお腹がぐ～っと鳴った。

「お腹空いたなあ～」

ぼんやりと考えていた美奈子は、

「あああ、駄目えっ！」

時計を見て小さく叫ぶと勢い良く立ち上がり、慌てて部屋を飛び出した。

急いで階段を駆け下りる。頭がまだ寝ているようで、五段目あたりで足を滑らせかけた。

「おばあちゃんっ！」

台所のドアを勢い良く開ける。

「おはよう、美奈子」

白い割烹着を着たおばあちゃんが、にっこりと笑った。

「え？ ええ？」

「どうしたんだい？ 朝からそんなに慌てて」

コンロに向かったおばあちゃんが、お玉で鍋をゆっくりとかき混ぜる。

あ、お味噌汁の匂い……。

美奈子はとっても温かな気持ちになった。

でも、幸せな気分には浸ってはいられない。

「おばあちゃん。ご飯の支度は私がやるよ！」

「お前は仕事に出掛けなきゃならないだろう。早く支度して、ご飯を食べなさい」

「……はあい」

美奈子はしょんぼりして、溜息を付いた。

おばあちゃんの朝ご飯、作るつもりだったのに。

目覚ましを止めた覚えなんてないのに、初日から失敗してしまった。

おばあちゃんの退院で、すっかり気が緩んでしまったみたい。

美奈子はがっくりと肩を落とした。

「美奈子」

のろのろと台所を出る美奈子は、おばあちゃんに呼び止められた。

「なあに？」

「私の割烹着を、綺麗にしておいてくれたんだね。真っ白でのりもしっかりと効いていて、久しぶりに気持ちが引き締まるよ」

おばあちゃんに褒められた。

ほっぺたが熱くなって気恥ずかしい。

「うん！ えへへ」

美奈子は頷くと、自分の部屋へ向かった。

☆☆☆

「わあ！」

食卓のテーブルへと並ぶ料理に、美奈子は目を丸くした。

ほかほかのご飯、お漬物、ししゃもが焼いてあって、それからお味噌汁。

「いただきまーす」

美奈子は両手を合わせ、お味噌汁のお椀を手にとった。

おばあちゃんのお味噌汁。

鰹節のダシの香り。

間引き菜と、お豆腐、油揚げ、細かく刻んだわけぎがたくさん乗っている。

美奈子の大好きなお味噌汁。

ひとくち飲んだ美奈子は胸が詰まり、微かにしゃくりあげた。

「材料が冷蔵庫に用意してあったよ。おや、よっぽど嬉しかったんだね」

「うん、うん」

ほんとは今朝、自分で作るつもりだったけど。

(あんなに長く、おばあちゃんが入院していたなんて、嘘みたい)

美奈子は嬉しくて、何度も頷いた。

「行って来まーす」

身支度を整えて、ぱたぱたと玄関に向かう美奈子。

おばあちゃんが見送ってくれる。

靴を履いていると、おばあちゃんがじーっと美奈子の顔を覗き込んでいる。

「どうしたの？」

「お前は相変わらず薄化粧だねえ。地味な顔立ちなんだから、もう少し華やかにしないと、いい人に振り向いて貰えないよ」

「も、もう！ そ、そんなのいないもん」

地味な顔って、自分でも結構気にしてるのに。

「おばあちゃん、早く帰るからね！」

美奈子は車のキーを指に引っかけて、可愛らしくウインクした。

## 八、美奈子とフルーツ牛乳

---

「……ふう」

モニターと睨めっこをしていた美奈子はマウスから手を離し、大きな溜息を付いた。

可笑しくて吹き出したりはしないけど、睨めっこに負けた感じ。

「う～ん」と伸びをして、椅子の背もたれに体を預ける。

美奈子が勤めている会社の設計部に所属しているのは男性社員ばかり、女性が一人だけの美奈子は、気疲れしてしまう。

ふと腕時計を見て、ポケットに入っている携帯電話をそっと撫でた。

(おばあちゃん。私に電話しようと思っても、こんなに長い番号をダイヤル出来ないよね……)

美奈子は自宅の玄関に、どんと鎮座する黒電話を思い出して困った顔になった。

留守番電話機能が付いた、プッシュホンに買い換えようと思ったけど。おばあちゃんはどうしても、黒電話じゃないと駄目だって聞いてくれなかった。

仕方ないから、操作が簡単な携帯電話でも契約しようかな。

でも、おばあちゃんに使えるかなあ？ あれこれと考えていたら、額が火照ってきた。

美奈子は席を立つと、IDカードを首から下げて設計室を出た。

ゆっくりと通路を歩き、色々な種類の自動販売機が設置されているスペースへ。

会社内は全フロアが禁煙になっていて、喫煙スペースなどは設けられていない。

美奈子はふと、乳製品の自動販売機の前に立つ人影に気付いた。ブルーの作業服に安全靴、頭にはきっちりと作業帽を被っている。

すぐに分かった、あの姿は機械工場の飛田さんだ。

美奈子よりも三つ年上。整った目鼻立ち、意志の強そうな瞳をした男性。セクハラ男などではないが、美奈子は飛田さんがちょっと苦手。若いのに、工作機械を扱わせたら工場長も驚くほどの腕前だって聞いた。

「ちょっといいかも」なんて、女子社員の給湯室会議で噂にもなったりする人。

でも職人気質っていいのか、加工図面に数値などの間違いがあると、すぐに設計室へと図面を持って駆け込んで来る。

「こんな加工をさせたら、機械が壊れるぞ！　すぐに書き直してくれ！」

その勢いがとても怖い。

だから美奈子は自動販売機に近づけなくて、彼の数歩後ろで体を竦めた。

飛田さんは左手に大きく膨らんだレジ袋を持っている。中身はたくさんの缶コーヒー。

ごっとな！

自動販売機が震える。

腰を屈めて、四角いパックを取り出した飛田さんは、レジ袋を揺すって両肩を落とし「ふう～

」と、大きな溜息をついた。

「ぷっ」

普段からは想像する事が出来ないその様子に、美奈子は思わず吹き出してしまった。

「え？」

(あっ、いけない！)

ぐるん、と首を回して振り向いた飛田さんと視線がぶつかり、美奈子は身を固くした。

(はわわ、お、怒られるっ！)

頭がパニックになり、あふれる言い訳と謝罪の言葉が美奈子の中で、大騒ぎを始めた。

「ん……ああ、仁科さんじゃないか」

「え？」

ぽかんとした美奈子、予想外の反応だった。

飛田さんは優しく微笑んで、挨拶のつもりなのか帽子のつばをちょっと摘んだ。

「休憩？」

「は、はい。あ、あの、あの、えとえと、とっ飛田さんは？」

「俺？ あはは、買い出し部隊さ。ジャンケンに弱くてね、後出しでも負けるんだ」

「そうなんですか」

「……ごめん。真剣に聞かないでよ、さすがに後出しして負けたりしないって」

美奈子がこくこくと頷きながら話を聞いていると、飛田さんは苦笑した。

「そう言えば、仁科さん。設計部にもだいぶ慣れてきたみたいだね。最近じゃミスも無いみたいだし」

「あ、あああ、ありがとうぎょざいますっ」

(囁んじやった。き、聞かれちゃったよね……)

でも、今日はいっぱい褒められる日。

美奈子は嬉しくて、でも恥ずかしくて頬が紅潮してくる。

「私は、数値を拾っているだけですから」

「その仕事が優秀なのさ。最近の工作機械は、制御がマニュアルじゃない。作業員のミスなんかで入力を間違えればそれで終わり、与えられた数値通りに加工してしまう。自動機械は不良品の再加工なんて出来ないから、会社が被る損害も大きいんだ」

飛田さんはレジ袋が重いのか、一度手を揺する。

「ああ、ごめん。機械加工の講釈なんて迷惑だね。とにかく、仁科さんの加工図面は丁寧で正確だから、とても有り難い。制御機器への入力作業も間違いが起こりにくいって、みんな喜んでるよ」

美奈子は恥ずかしくて顔を上げていられず、次第に俯いてしまう。

「……あ、ありがとうございます」

美奈子は、消え入るような声で言った。

「ああ、そうだ！」

声を上げた飛田さんは、缶コーヒーが詰まっているレジ袋にひとつだけ入っていた、四角いパックを取り出した。

「はい、おめでとう。良かったね」

「え？」

差し出されたのは、フルーツ牛乳のパック。

両手で受け取った美奈子は、理由が分からず困惑した。

「仁科さんのおばあちゃん。退院でしょ？ 仁科さんも頑張ったんだからご褒美、安っぽいけど」

そう言って、飛田さんがはにかんだ。

「あ、ありがとうございます！ あのあのっ、祖母の事を、ご、ご存じだったんですか？ 治療は完了してるからって、う、浦辺先生がっ！ って、私何言ってるんだろっ！ あ。で、でもっ！ せっかく買われたのに、数が足りなくなりますよ？」

「いいの、俺が間違えて買っただけだからさ。じゃあ……」

飛田さんはそう言って、さっさと機械工場の方へ歩き出してしまふ。

でも間違えたって……缶コーヒーとフルーツ牛乳は、別の販売機なのに。

「あ、ありがとうございますっ！」

美奈子がぺこりとお辞儀すると、飛田さんは前を向いて歩きながら、ひらひらと手を振った。

飛田さんって、仕事とはぜんぜん雰囲気が違うんだ。

(貰っちゃった、それに褒められちゃった……)

手のひらに乗せた、冷たいフルーツ牛乳のパックを見つめて、美奈子がぐるぐる考えていると

。

「みーなこっ！」

背中から、明るい声が聞こえてきた。